

三朝温泉病院人間ドック 検査項目の解説



検査項目	検査で分かること
尿検査	
尿蛋白	<p>尿中のたんぱく質を調べます。</p> <p>血液は腎臓の中の不要物だけがろ過され、尿中に排泄されます。正常であれば血液中の蛋白は腎臓ですべて再吸収されます。</p> <p>腎機能が低下すると体にとって必要な蛋白が腎臓からもれ出てきます。</p>
尿糖	<p>尿中の糖分を調べます。</p> <p>血液中の糖濃度がある値(おおよそで160~180mg/dL)を超えると再吸収しきれなくなり尿中に糖が漏れ出てきます。</p> <p>糖尿病、甲状腺機能亢進症や腎性糖尿などで陽性となります。</p> <p>腎臓糖尿とは血糖値が高くなくても、尿糖が陽性になる病態で問題ありません。</p>
尿潜血	<p>尿に血液が混じっていないかを調べます。</p> <p>試験紙に浸して反応をみます。</p> <p>試験紙に反応があれば、尿の通り道のどこかに出血源があります。</p> <p>尿路結石、膀胱炎、糸球体腎炎などで陽性となります。</p> <p>女性は病気でなくても陽性になる率が高めです。</p>
比重	<p>尿の比重を調べます。尿の中には、さまざまな物質が含まれているため、普通の水に比べて比重が高くなります。この比重の変化を調べることで腎機能の異常などを発見することができます。</p> <p>尿比重が高い場合は糖尿病、脱水症など、低い場合は腎不全、尿崩症など尿を濃縮する機能の低下が疑われます。</p>
尿沈渣	<p>尿を遠心分離器にかけてできた沈殿物を調べます。</p> <p>尿中に存在する物質の凝集が尿沈渣です。さまざまな物質があり、その種類によってどのような疾患に由来する物であるかを判断します。</p>
便検査	
便潜血	<p>便に血が混じっているかどうかを調べる検査です。</p> <p>便を二回とって調べます。</p> <p>陽性(+)の場合、消化管の出血性の病気、大腸ポリープ、大腸がんなどが疑われます。その場合は、大腸の検査が必要となります。</p>
血液一般検査	
赤血球(RBC)	<p>赤血球は肺で取り入れた酸素を全身に運び、不要となった二酸化炭素を回収して肺へ送る役目を担っています。</p> <p>赤血球の数が多ければ多血症、少なければ貧血が疑われます。</p>
血色素(Hb) (ヘモグロビン)	<p>血色素とは赤血球に含まれるヘムたんぱく質で、酸素の運搬役を果たします。</p> <p>減少している場合、鉄欠乏性貧血などが考えられます。</p>
ヘマトクリット(Ht)	<p>血液全体に占める赤血球の割合をヘマトクリットといいます。</p> <p>数値が低ければ鉄欠乏性貧血などが疑われ、高ければ多血症、脱水などが考えられます。</p>

白血球(WBC)	白血球は細菌などから体を守る働きをしています。 数値が高い場合は細菌感染症にかかっているか、炎症、腫瘍の存在が疑われますが、どこの部位で発生しているかはわかりません。たばこを吸っている人は高値となります。 少ない場合は、ウイルス感染症、薬物アレルギー、再生不良性貧血などが疑われます。
血小板数(PLT)	血小板は、出血したとき、その部分に粘着して出血を止める役割を果たしています。 数値が高い場合は血小板血症、鉄欠乏性貧血などが疑われ、低い場合は再生不良性貧血などの骨髄での生産の低下、特発性血小板減少性紫斑病などの体の組織での亢進、肝硬変などが考えられます。
白血球分類	好中球・・・炎症や細菌感染、白血病などで高値を示します。 リンパ球・・・ウイルス感染、白血病で高値を示します。 単球・・・結核、膠原病で高値を示します。 好塩基球・・・ある種の白血病で高値を示します。 好酸球・・・アレルギー疾患、寄生虫疾患などで高値を示します。

生化学検査

肝臓系検査	TP(総タンパク)	血液中の総たんぱくの量を表します。 数値が低い場合は栄養障害、ネフローゼ症候群、がんなど、高い場合は多発性骨髄腫、慢性炎症、脱水などが疑われます。
	アルブミン	血液蛋白のうちで最も多く含まれるのがアルブミンです。 アルブミンは肝臓で合成されます。 肝臓障害、栄養不足、ネフローゼ症候群などで減少します。
	ALP(アルカリフォスファターゼ)	主に肝臓、骨、小腸などに分布している酵素です。 肝疾患や骨の病気で高くなります。健康体の場合でも小児の成長期は高くなります。
	AST(GOT)とALT(GPT)	AST(GOT)は、心臓、筋肉、肝臓に多く存在する酵素です。ALT(GPT)は肝臓に多く存在する酵素です。 数値が高い場合は急性肝炎、慢性肝炎、脂肪肝、肝臓がん、アルコール性肝炎などが疑われます。 GOTのみが高い場合は心筋梗塞、筋肉疾患などが考えられます。
	γ-GTP	γ-GTPは、肝臓や胆道に異常があると血液中の数値が上昇します。 数値が高い場合は、アルコール性肝障害、慢性肝炎、胆汁うっ滞、薬剤性肝障害が疑われます。
	LDH	肝臓、心筋、骨格筋などの障害や、血液疾患などで高値を示します。
	CHE(コリンエステラーゼ)	肝臓で合成される蛋白で栄養障害や肝炎など肝臓のタンパク質合成能が低下すると低値を示します。 また脂質代謝とも関連しており、肥満、高脂血症、脂肪肝など脂質合成が亢進していると高値を示します。
膵・唾液腺酵素検査	アミラーゼ	膵臓、唾液腺から分泌される消化酵素のひとつです。 膵疾患や唾液腺炎、耳下腺炎で高値を示し、慢性膵炎、膵癌などで低値を示します。
腎臓系検査	クレアチニン(Cr)	アミノ酸の一種であるクレアチンが代謝されたあとの老廃物です。筋肉量が多いほどその量も多くなるため、基準範囲に男女差があります。 腎臓でろ過されて尿中に排泄されます。 数値が高いと、腎臓の機能が低下していることを意味します。

	eGFR	腎臓が1時間あたりに処理できる尿量を示すGFR(糸球体濾過量)を血液中のクレアチニン値、年齢、性別から計算式により求めたものです。 腎機能のスクリーニング検査として腎機能異常を疑う場合や経過観察として用いられます。
	BUN(尿素窒素)	腎機能障害で高値を示します。 脱水、絶食、タンパク質の過大摂取などでも一過性に高値を示す場合があります。
	尿酸(UA)	この検査では尿酸の産生・排泄のバランスがとれているかどうかを調べます。 高い数値の場合は、高尿酸血症といいます。高い状態が続くと、結晶として関節に蓄積していき、突然関節痛を起こします。これを痛風発作といいます。また、尿路結石も作られやすくなります。
電解質検査	Na・K・Cl	体液中のイオン濃度で、体液バランスを知ることができます。
	Ca(カルシウム)	筋肉や神経の興奮性やある種の内分泌臓器の働きを調節しています。 また骨の形成に関与しています。
	IP(無機リン)	すべての代謝に欠かせない無機物です。 骨の代謝(骨への吸収と放出及び腎臓からの排泄)にとっても重要です。
	Fe(血清鉄)	鉄欠乏性貧血、慢性出血などで低値を示します。 鉄分の多い食事は、肉、レバー、ひじき、貝類、緑黄色野菜などです。
脂質系検査	総コレステロール(TC)	血液中にはコレステロールという脂質が含まれています。ホルモンや細胞膜を作るうえで大切なものですが、増えすぎると動脈硬化を進め、心筋梗塞などにつながります。 数値が高いと、動脈硬化、脂質代謝異常、甲状腺機能低下症、家族性高脂血症などが疑われます。低い場合は、栄養吸収障害、低βリポたんぱく血症、肝硬変などが疑われます。
	HDLコレステロール	善玉コレステロールと呼ばれるものです。血管壁に付着したコレステロールを回収して肝臓に運び戻します。少ないと、動脈硬化の危険性が高くなります。 数値が低いと、脂質代謝異常、動脈硬化が疑われます。
	LDLコレステロール	悪玉コレステロールと呼ばれるものです。 LDLコレステロールが多すぎると血管壁に蓄積して動脈硬化を進行させ、心筋梗塞や脳梗塞を起こす危険性を高めます。
	中性脂肪(TG)	体内の中でもっとも多い脂肪で、糖質がエネルギーとして脂肪に変化したものです。数値が高いと動脈硬化を進行させます。低いと、低βリポたんぱく血症、低栄養などが疑われます。
	リポプロテイン(a)	遺伝的な動脈硬化の危険因子です。
	心筋・骨の検査	CPK
糖代謝系検査	血糖値	血糖とは血液中のブドウ糖のことで、エネルギー源として全身に利用されます。測定された数値により、ブドウ糖がエネルギー源として適切に利用されているかがわかります。数値が高い場合は、糖尿病、膵臓癌、ホルモン異常が疑われます。
	HbA1C(NGSP)	HbA1C(ヘモグロビン・エーワン・シー)は、過去1~2ヶ月の血糖の平均的な状態を反映するため、糖尿病のコントロールの状態がわかります。 また、空腹時血糖が126mg/dL以上かつHbA1c6.5%以上なら糖尿病と判断します。

感染症系検査	CRP	細菌・ウイルスに感染する、がんなどにより組織の傷害がおきる、免疫反応障害などで炎症が発生したときなどに血液中に増加する急性反応物質の1つがCRPです。細菌・ウイルス感染、炎症、がんはないかを調べます。
	HBs抗原	B型肝炎ウイルスに感染していないかを調べます。
	HCV抗体	C型肝炎ウイルスに感染していないかを調べます。 ただし、C型肝炎は感染から1～3ヶ月ほど経過しないと陽性反応となりません。感染直後にしても陰性となります。
自己免疫関連	RF(リウマチ因子)	慢性関節リウマチの血清中に検出される体内物質です。 患者のおよそ70～80%が陽性になり診断や治療効果の判定に役立ちますが、患者でも陰性になることがあるほか、慢性関節リウマチ以外でも陽性になることがあります。
腫瘍マーカー	CEA	大腸、膵臓、胆のう、肺、子宮などの癌で高値を示します。 肝炎、膵炎、加齢や喫煙などでも高値を示す場合があります。
	CA19-9	膵臓がん、胆道系の癌、大腸がんなどで高値を示します。 膵炎、胆石症、卵巣嚢腫などの場合にも高値を示すことがあります。
	AFP(α フェトプロテイン)	肝癌で高値を示します。
	PSA	前立腺がん、前立腺肥大で高値を示します。
生理検査		
心電図	心臓の筋肉に流れる電流を体表面から記録する検査です。電流の流れ具合に異常がないかがわかります。 また1分間に電気が発生する回数である心拍数も測定されます。 心臓の電気的な活動の様子をグラフの形に記録することで、不整脈があるか、心筋の血液循環が不良(狭心症)になっていないか、心筋が壊死(心筋梗塞)していないか、などがわかります。	
眼底検査	目の奥の状態を調べる検査です。通常眼底写真にて検査します。 動脈硬化の程度、高血圧、糖尿病による眼の合併症や緑内障・白内障の有無などを調べます。	
聴力検査	主に、1000Hz(低音域)と4000Hz(高音域)の聴力を調べます。 数字で表記される場合、1000Hzでは30dB(デシベル)以下、4000Hzでは30dB以下であれば異常なしです。 dBとは音圧の単位です。年齢とともに4000Hzの聴力は低下しますので、高齢者では40dB程度聞こえれば異常なしと判定されることもあります。	
呼吸機能検査	大きく息を吸ったり吐いたりして、肺の機能を評価する検査です。 正確に調べるために、精一杯吸ったり吐いたりしなくてはなりません。	
肺活量	年齢、性別、身長から算出された予測肺活量に対して、肺活量が何%であるかを調べます。 80.0%以上が基準範囲です。79.9%以下では肺のふくらみが悪いことを意味し、間質性肺炎や肺線維症などが考えられます。	
1秒率	また、最大に息を吸い込んでから一気に吐き出すとき、最初の1秒間に何%の息を吐きだせるかを調べます。 69.9%以下では慢性気管支炎、肺気腫(はいきしゅ)などの慢性閉塞性肺疾患が考えられます。	

超音波検査	<p>・腹部エコー 腹部皮膚表面部分に超音波を発信する装置をあてます。 内臓からの反射波をその装置が受けとり、電気信号にかえてモニターに写します。 きれいな画像が得られるように、装置をあてる部分にはゼリーを塗ります。 肝臓、すい臓、腎臓に腫瘍があるか、胆のうには胆石などがあるかを調べます。</p> <p>・頸動脈エコー 簡便で視覚的に動脈硬化の診断が出来る検査です。 動脈硬化をおこすと血管壁が厚くなったり硬くなったりします。その様子が画像で簡単に確認できます。 動脈硬化の有無、つまり具合の観察、プラークの観察などを検査します。</p> <p>・CAVI(血圧脈波検査) あお向けに寝た状態で両手、両足首の血圧と脈波を測定します。 動脈のかたさ、動脈の詰まり、血管年齢などを検査します。</p>
-------	--